



COVID-19 が人類に残してゆくもの

医学部の講義で天然痘やペストなどの感染症を学ぶとき、私たち人類が克服してきたもの、という思い込みがあり、医療の歴史を学ぶスタンスだった。ちょっと考えると、前世紀のスペイン風邪など、ウィルス疾患についてはまだしっかり制圧しきれていたわけではなかったのに、愚かにも過去のこととして通り過ぎてきた。COVID-19 に対して、私たちがとっている対応は、1世紀前のウィルス疾患に対するものと何ら変わっていないことに、愕然とする。

著者が病棟医長であったときに、感染制御部によくお願いしたのは、精神科病棟では、インフルエンザの流行期などの例外を除き、基本的にマスクをしないで勤務することをお許しいただくことだった。マスクをすると、コミュニケーションに必要な情報がかなり失われてしまう。個体の判別も難しくなる。反対に、コミュニケーションが苦手な人にとっては精神科に限らず、無機質なスタッフとして勤務するほうが楽なので、いつもマスクをかけている人もいた。今はマスクをしない勤務はあり得ないし、処置などの場合を除き、相手と一定の距離を保つことが望ましいとされる。今の著者の職場では、キャンパスに数千人の学生がいるが、距離を保ち、アルコール消毒や換気などを行うことで、感染の広がりを防ぐことができている。時折感染者が出るが、ほとんどのケースは友人との飲み会などによるものである。著者の教師としての仕事は、若い人たちに帰途、池袋の街に立ち寄らないよう注意喚起することである。

大学時代は、まだ半人前とはいえ、社会人としての行動を学んでいく時期であるが、ほとんどの行動が制限され学

びの機会を奪われてしまっている。今年生まれた幼い生命は、まずマスク姿のお母さんを見ることになるのだろう。表情を認識することが苦手な発達障害の人、視覚刺激のほう情報が得やすい人にとっては、ますます SNS など、生の現実ではなくて、デジタルに加工された情報に頼ることになるだろう。米国のトランプ元大統領は、今のようにネットからの情報を吸収する人が多くなかったら、簡単に「フェイクニュース」を流すことはできなかつたらう。

COVID-19 によって、世界の経済や、何よりも多くの人命が甚大な被害を被っているが、私たちのコミュニケーションも大きな影響を受けている。遠隔医療やネット相談、ウェブ上の介入プログラムなどが注目を集めているが、視線を合わせて、相手の息遣いを感じながら行う精神療法と比べて、どのようなメリット・デメリットがあるだろうか。現状では、感染制御が一義的な目標であるので、こうしたコミュニケーションも日常的に行われている。しかし COVID-19 の蔓延を乗り越えることができたときに、私たちの他の人たちとのかかわり方や、外の世界からどのような情報を集めるのか、微妙な変化が残されるかもしれない。一時期オンライン飲み会が流行って、著者も好奇心半分で、仲間との飲み会を経験した。最近は、「やっぱりオンライン飲み会はつまらないね」ということになって、下火になっているらしい。そうしたニュースを聞くと、何かほっとするものがある。

COVID-19 がひそかに私たちに残していくものについて、私たち精神科医は敏感であらねばならないと感じている。

池淵恵美